

自主シンポジウム18

幼児教育におけるジェンダーについて

企画者：栗原 泰子 内海崎貴子 野尻裕子
(川村学園女子大学・女性学研究所)

司会者：栗原 泰子

話題提供者：内海崎貴子
野尻 裕子

指定討論者：木村 涼子(大阪女子大学)

【問題の所在】

本シンポジウムの企画者は、幼児教育学科に所属していると共に、川村学園女子大学の女性学研究所の所員として活動している。女性学研究所の活動に参加することをきっかけとして、幼児教育においてはジェンダーが研究の俎上にあげられていないのではないかとということから、研究を進めてきた。

日本においてジェンダーの概念が導入されてきたのは、1980年代である。その後 1990年代以降、さまざまな学問領域においてジェンダーは取り上げられてきている。教育の世界においても、1990年代半ばから盛んに研究が行われてきている。これらは学校教育の中の「ヒドゥン・カリキュラム」の問題として取り上げられ実践研究も進められている。幼稚園をフィールドとして行われている研究は、森繁男⁽¹⁾らが1987年に行った「ジェンダーの自明性を構成するかくれたカリキュラム」を明らかにするアプローチがみられるが、それ以降幼児教育におけるジェンダーに関する研究はあまりみられないのが現状である⁽²⁾。

幼児教育においてジェンダー研究がすすまない理由は何であろうか。幼児教育におけるジェンダーの考え方はどのようなものなのだろうか。そしてその取り組みはどのような方向性を考えていったらよいのだろうか。以上のことが私たちの問題意識である。

男女共同参画社会が多くの自治体で謳われ、行政レベルあるいは民間レベルでの取り組みも盛んである。男女共同参画社会は、今後も広範囲に広がりを見せるであろう。そうだとするならば、ジェンダーの考え方を1つの価値観として学生へ伝えていくことも重要な問題であると思う。なぜなら、彼女たちは保育現場で子どもたちと関わって行かなければならないからである。そう考えると、幼児教育とジェンダーについて考えてみた場合、保育現場において、保育者がどのような意識を持っているかによって、子どもへの援助も異

なってくると思われる。また、その保育者を養成する大学等においても同様の課題となってくるであろう。その必要性については考えていくべきである。

【企画の意図】

私たちは日本乳幼児教育学会第13回大会(2003年11月)において、「幼児教育におけるジェンダーについて考える」というラウンドテーブルを行った。ここでは、元幼稚園教諭から、ジェンダーの視点から自分の保育を振り返った報告と、財政的視点からみた子育ての課題、幼児教育におけるジェンダー研究の動向、子どもの育ちと保育者の問題性と、4人が話題提供を行った。このラウンドテーブルの参加者から、保育現場における保育者の言葉がけの問題、保育者養成を担当する教員のジェンダー観の問題、教育の中でのジェンダー視点について、などの意見が出された。そこでこの討議をふまえて、

今回は、2名が話題提供を行い、幼児教育におけるジェンダーの問題を2つの視点に絞って考えていきたいと思う。1つ目は、幼児教育の立場から幼児教育におけるジェンダー研究の動向について、幼児教育関連学会の研究発表及び学会誌の論文内容などから、野尻が報告を行う。次に、女性学、教育学の立場から、保育現場におけるジェンダー・チェック・リストの作成とその実施について内海崎より報告を行う。指定討論者からは、教育社会学の立場から、お話をさせていただく。

幼児教育におけるジェンダー研究の動向と課題

野尻 裕子

現状では幼稚園、保育所において保育者として働く人の殆どが女性であり、これらの施設が女性の職場として社会的にも認知されている。そのような意味で言えば、看護の分野でも同様のことが考えられるが、看

護分野においてはその場における権力構造により幼児教育現場よりもジェンダーの意識化がされやすい環境にあると考える。つまり幼児教育現場は、目に見える姿(相手)としての男性が見えにくく、そのことは権威として男性存在が働きにくい職場になっていると考えられる。

乳幼児を主たる研究対象としている学会(日本保育学会・日本乳幼児教育学会・日本発達心理学会・日本子ども社会学会)において、1990年度から2002年度までの間にジェンダーに関する研究がどの程度行われているかを調査した結果は、乳幼児教育の分野での研究の少なさを物語っている。しかしその研究結果からは、保育にかかわる者のジェンダーの意識化が進んでいない現状が見て取れる。幼児期がジェンダー形成最初期という点からみると、保育者が保育意図の中にジェンダー観を位置づけていくことは重要なことであろう。

このような中、日本保育学会では平成16年度の課題研究として、「子育てや保育に内包されてきた性差別を掘り起こすとともに、性役割について問い直す」ために「ジェンダー」を取り上げられた。保育現場がジェンダーの再生産装置として機能しているという指摘からも、幼児教育分野における今後のジェンダー研究の方向性を考えた時、2つのポイントがあげられる。1つは養成校のカリキュラムの問題である。現段階で実際に行われている専門科目の内容に、ジェンダー視点が導入されたものは少ないだろう。しかし保育に関する学習を行っている学生の多くが、性役割分業観に縛られているケースが多いといったことも事実である。またこのことは養成教員自身のジェンダー観も含めた問題として考えなければならないだろう。2つめには、現職教員のジェンダー観と保育との関連についての問題である。先行研究によれば保育者の無意識的なジェンダー・バイアスに基づく保育行為の存在、またそれらを含め保育環境に潜在化するジェンダーなどが明らかにされつつある。しかし一般的に既に子どもの保育に関わっている保育者が、自身のジェンダーバランスを確認する機会は少ないだろう。そこで保育者のジェンダーに対する理念と実践の間に存在する溝についていかに自覚化するかが重要だろう。

子どもの育ちと保育者の問題性

—ジェンダー・バイアス・チェックシート作成の試み—

内海崎 貴子

子どもが育つというのは、「社会の中で自分らしく生きていけるようになるということ」である。そのためには、個々の子どもが持つ多様な力を発揮できること、一人ひとりの違いを認めること/認められることが重要である。

しかし、保育者に「男の子は男らしく」、「女の子は女らしく」というジェンダー・バイアスが存在すると、個々の子どもが持っている「その子らしさ/自分らしさ」がみえにくくなる。「〇〇らしさ」というジェンダー・バイアスは子どもの個性の伸張を疎外し、「子どもの育ち」を危うくする可能性がある。

保育者が自分のイメージする子ども像にとらわれていると、そこから逸脱する子/イメージと異なる子をおかしいとってしまう。援助者である保育者のジェンダー・バイアスに基づいた言動が、子どもの自分らしさの発見、自尊心の形成を阻む危険性もあるのである。

報告者は2001年度から保育士・幼稚園教諭の研修において、ジェンダーの視点に基づく研修会に関わっている。大学のあるA市の保育士研修では4年間にわたって、保育におけるジェンダー問題を取り上げている。A市の場合、勤務する保育士全員が「保育とジェンダー」に関する研修を受けるのである。従って、研修終了後、参加者は「保育におけるジェンダー問題」を知識として理解していると思われる。

しかしながら、昨年の研修会参加者の報告によると、実際の保育の現場では、保育者のジェンダー・バイアスの基づいた保育が依然として行われているという。研修を受けたにもかかわらず、保育者は現実の保育場面では、自身の保育に潜むジェンダー・バイアスに気づかないことが多いというのである。研修で理解されたと思われるジェンダーの視点が、現実の保育に生かされていないのではないだろうか。

このような問題意識から報告者は、保育者が保育の現場で利用できるジェンダー・バイアス・チェック・リストの作成を試みることにした。今回は、その作成のプロセスとそこで浮上してきた問題点を中心に報告する。

<引用文献>

- (1) 森繁男「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』1995 pp.132-149
- (2) 野尻裕子・栗原泰子「幼児教育におけるジェンダー研究の動向」と今後の課題」川村学園女子大学女性学年報創刊号2003

pp.81-87